



左から藤本壮介氏、隈研吾氏、大栗育夫氏、乾久美子氏。

## 密度が生み出す環境と風景

### ——「300人のための集合住宅」長谷工住まいのデザインコンペティションへ向けて

#### 隈研吾×乾久美子×藤本壮介×大栗育夫

「密度が生み出す環境と風景」

現代日本の都市において、集合住宅はその基底をなす重要な要素です。そこで、今後の建築業界を担う建築学生が、リアルな現状を把握した上で集合住宅の新たな方向性を提案していけるようなデザインコンペティションを実施します。そのテーマを決めるために座談会を行い、集合住宅から考えられる現状を話していただきました。（編）

——「密度が生み出す環境と風景」

——集合住宅を都市施設として考えていくことは、建築や都市を考える上でも面白いテーマです。ル・コルビュジエによる「都市は住宅によって構成される」という言葉がありますが、今回のコンペは都市の基盤である集合住宅を考え、魅力的な住環境の提案を募集しようというものです。たとえば住戸内外の繋がり、各ユニットの上下左右の関係性、都市や外部環境との繋がりをどう作るかが考えられます。またターゲットを学生に絞り、若い人にリアリティのある集合住宅を考えていただく機会をつくることも目的のひとつです。そこでまず長谷工が考える集合住宅、またコンペへの意気込みをお伺いできますか。

**大栗育夫**（以下、大栗） 当社も今年で創業70周年を迎え、これまでに約44万戸の集合住宅を建設してきました。70周年を迎えるにあたって当社の社会貢献活動のひとつとして、学生コンペを開催することで人材育成の一助になればと考えています。その反面、最近の学生は集合住宅をあまり設計したからないようですが、集合住宅は今後都市の一要素としてさらに重要な役割を担ってくるのではないのでしょうか。そうした現状を含め、若い人にもリアルな観点から集合住宅を考えてほしいですね。

**主催** われわれは集合住宅といっても単なる住空間ではなく住環境をつくりたいという思いがあり、全体を計画する際は周辺環境もかなり意識しています。でも内部の住空間そのものは、共用の廊下やポーチ、バルコニーといった構成要素のみを組み合わせているのが現状です。もっと自由な構成で新しい魅力的な住空間ができないだろうかと思い、それを学生の新鮮な発想で考えていただ

きたいですね。

**大栗** われわれは作品としての集合住宅をつくるのと同時に、事業として安定して売れるものをつくらなければなりません。この2点を同時に成立させるために常に新たな方法を模索しているのです。

#### 「集まって住む」ということ

**隈研吾**（以下、隈） 集合住宅はビルディングタイプの中でいちばん難しいですね。僕も大学の設計課題にあえて集合住宅を出題しますが、ほとんど悲惨な結末に終わります。たとえば間口と奥行の関係を分らないまま構成やコンポジションなどで面白くしようとしても、結局どっちつかずになってしまう。まだ戸建て住宅の設計ならなんとかなる。でも集合住宅となるとリアリティもなければアイデアもそれほど面白くないことが多いのです。

**乾久美子**（以下、乾） でもリアリティだけで設計すると、結局整理整頓が上手な人、うまく詰め込んだ人勝負になりがねない。だからといってリアリティを欠いたアイデア・コンペにすると、集合住宅という形式ではないものや、密度も非常に低く、現実的に見て参考にならないものが出てきてしまう。集合住宅は周囲の環境に関係なく設計することもできるので、それこそ世界中で同じ仕組みを使える可能性があります。でもどの国でつくってもいいような提案ではつまらないでしょうね。

**隈** 学生もこうしたコンペを通じて集合住宅を考える機会ができることは本当にいいことだと思います。でも設定にどれ程のリアリティを持たせるかが難しい。自由に発想してもらうにも、ある程度の範囲を決めないと学生自身が集合住宅の前提すらつかめないこともあると思います。

——戸建て住宅と集合住宅のそれぞれを設計する場合では、どう意識を変えていますか。

**藤本壮介**（以下、藤本） 僕はまだ実作として集合住宅はありません。今設計している「Tokyo Apartment」（『住宅特集』0701）は規模が小さいこともありますが、意識は戸建てと変わらず、住む場所をどう作るかを考えました。その上で集合す

るなりの、戸建てではできない楽しさが出るようにつくっています。たとえばある密度で人が集まった時に、その規模でないと楽しめない楽しい環境があるのではないのでしょうか。都心で集まって住むことはネガティブな印象になりがちですが、逆にこれだったら集まって住みたいという、そんなアイデアが出てきてほしいですね。

**乾** 今年の春竣工した「Apartment 1」（本誌0708）はたいへん小さなものです。1軒の家として建てても狭小であるものを5軒に分割するという案で、今まである中でもかなり悲惨な条件だったと思います。どう考えても悲惨なのでその悲惨さが楽しく見える、逆転の発想から面白さが出ればいいなと気持ちを切り替えてやっていました。今回のコンペも集まって住むことが当然楽しいという方向になってほしいですね。

#### 都市を形づくる要素として考える

**藤本** 現代は集合住宅がそのまま都市を形成している部分もありますよね。その都市の風景が一変してしまうようなものが現れてもいい。たとえばル・コルビュジエは「ヴォアザン計画」（1925）で、集合住宅が緑の溢れる中にぽつぽつと建っている都市を構想しました。すると元々の美しいパリの町とは対極にあるまったく違う街だけど、それ以上の豊かな生活が過ごせるという大きな提案だったわけです。何か大きなビジョンで、僕らの知っている街とか都市が変わってしまう予感をさせるものが出てくるといいですね。

**隈** 都市の中において、集合住宅自体が最もクリティカルで決定的なので、それを変えるだけで日本の都市、たとえば東京のイメージはすごく変わると思います。現在の東京のイメージを決定している要素がマンションのバルコニーやタイルになってるので、それを変えたらこうなるという夢を、是非若い人に抱いてほしい。

**藤本** そういえば卒業設計で集合住宅をつくったのを思い出しました。銀座の真ん中に集合住宅を設計したんです。学生時代の僕はそれで何か夢



左：「東雲チャンネルコートCODAN3街区」（隈研吾）  
中：「Tokyo Apartment」（藤本壮介） 画像提供：藤本壮介  
右：「Apartment 1」（乾久美子）

撮影：本誌写真部（特記を除く）

のような街をつくりたいと思っていました（笑）。

#### 密度に見る集合住宅のリアリティ

**乾** コンペでは場所性を盛り込んだ設定もあり得ると思います。たとえば藤本さんが設計されている「Tokyo Apartment」のように、現在の東京もしくは日本という特殊な状況の中で集合住宅をつくるとしたらこうならざるを得ないということをもっと考えていくことは面白いと思いますね。

**藤本** 今回は家と都市との距離、離れ具合というものが発想の基点となっています。通常、集合住宅を考える時には、「家」とか「都市」というものが個別に存在していて、それは建築の言葉では「ユニット」とか、「共用廊下」、「パブリックスペース」などというふうに言われたりしますが、そういう既存の要素をどう面白く組み合わせるかを競うということになると、ちょっとつまらないと思うんですね。そういう、「都市」というものと「家」というものが元々あるという前提をむしろ疑ってほしい。実は両方とも個別に独立しては存在していないような気がします。「家」と「都市」はもっと溶け合ってもいい。僕はそこまで遡り、人がある密度で都市の中に住む時にどうなるのか、ということに興味があります。今までは、「集合住宅」という建物が既にあり、その中をどうするかということしか考えてこなかったように思います。だから今回は、いわゆるユニットや共用部といった言葉は使わず、「住む場所」としての独立性だけを考え、密度を設定するだけで、そこに現れるどうしようもないリアリティを考えるといいのではないのでしょうか。そこでは今までのように住まなくていいし、もっと快適に住めるかもしれない。そうして豊かさを伴った高密度な住み方が見えてくるといいですね。

——密度を考える時、そこにどう現実性を与えるかが問題ですね。

**隈** 僕が設計した、「東雲チャンネルコートCODAN3街区」（本誌0405）の時は容積率ですごく悩みました。集合住宅では高層になってしまう350％という高い容積率だったからです。それを中

層でつくとひといいことになるわけです。南の採光をとれる部屋はほとんどないし、住戸と住戸はすぐ向かい合ってしまう。やってみるまでは予備知識がなかったからそれこそ学生と同じで悲惨な状態で、350％の意味が分からなかった。

**主催** 通常われわれが設計しているものでは容積率は200％ぐらいが平均的です。敷地は1ha（10,000m<sup>2</sup>）ぐらいが多く、世帯数が230～240ほどです。1家族3.5人とすると、800人ぐらいの規模ですね。——なるほど。密度を設定することで集合住宅の現実が見えてきますね。

#### 集合することの快適さ

——都市の中にある密度で暮らすということを、世界的に見るとどうですか。

**隈** たとえばフランスでは、ル・コルビュジエより前にオスマンによるパリ改造が行われ、都市の景観は集合住宅を基盤にして作り出されました。郊外型の住宅とは違い、労働と居住が一体になっている都市のライフスタイルも生み出されました。それはもっと前まで遡ってローマの都市にしても、都市の中にある程度の密度で住んでいこうという思想がその中にあるように思います。それは今の時代にアピールできるものではないでしょうか。——日本の現状はどうでしょう。

**藤本** 僕は北海道出身で、大学で初めて東京に出てきましたが、東京の密度には決して否定的ではないんです。場所にもよりますが、僕が住んでいた所は2階建ての木造の家が大量に建っていて、その前の道幅も2mぐらいでした。そこに住み始めた時に、ある密度で集まって住むことはすごく快適な部分もあった。家から出た時、そこが外というより、住む場所としては家と連続している。北海道では家の中と外は明らかに分かれていて、冬など外に出たら死ぬかもしれない（笑）。だから高密であることが悪いのではなく、必ずどこかで逆転できる希望はあるんですね。でも1ha800人では僕が考える快適な密度を超えている可能性

があります。そこにはそれなりの快適さがあるのかもしれませんが。

**乾** 最近仕事で香港に行っていますが、香港の集合住宅は日本に比較して、高さは何倍もあるし、だからと言って平面的に疎ではなくて、こちらも結構高密度です。つまり日本の1ha800人という密度を遥かに超えた集合住宅が、香港には当たり前のように建っています。香港は湿気もあるし環境はそんなにいいわけではありません。でもそれが不快に見えるかということそんなことはなく、それなりに楽しそうなのです。密度に対してアレルギーがないだけで、光景も暮らしもぜんぜん違ってくる。だから密度が高いから厳しいかといえば、必ずしもそうではないと思います。

**藤本** そうなるとある種の立体都市みたいなものになればいいのかもしれないですね。ル・コルビュジエの「マルセイユ・ユニテ・ダビタシオン」（1952）はお店も幼稚園も入っているじゃないですか。もっと生活全体を考えられるといいですね。

**隈** 1ha800人の密度を満たしていれば、そうした機能はいくらでも足していいいわけですよ。あとは場所をどう設定するかですね。——そうですね。密度はいいとして1haという敷地の規模でいいでしょうか。

**主催** それがわれわれが設計しているものとしては平均的な規模ですね。

**藤本** でも100m四方では学生は引いてしまうかもしれません（笑）。

**隈** ル・コルビュジエの「300万人のための現代都市」（1922）にならって、300人という設定にしたらどうですか。1世帯3.5人で考えても、85世帯ぐらいの計算ですので、学生が設計する規模としてもちょうどいいでしょう。そこに1ha800人と同じ密度になる敷地を設定しましょう。

——それでは「300人のための集合住宅」をテーマにしましょう。高層化したり低層でつくったり、いろんなコンテキストをリアリティを持って考えてもらえるといいですね。

（2007年7月19日長谷工エコーポレーションにて／談・文責：編集部）